

## 1. 序論

チャールズ・ディケンズ ( Charles Dickens, 1812-70 ) の長編小説第 4 作『骨董屋』( *The Old Curiosity Shop* ) は、週刊誌『ハンフリー親方の時計』( *Master Humphrey's Clock* ) に 1840 年 4 月から 41 年 2 月まで連載された。この『骨董屋』はディケンズの数ある作品の中で最も好評と不評の両極端な評価をされてきている。それは専ら主人公ネル ( Little Nell Trent ) に関するものだ。連載中、読者はネルの行動に一喜一憂し、もはや彼女の死が避けられないと察するや、ディケンズにネルの「助命嘆願書」を送る読者まで現れた。しかしその熱狂的賞賛への反動からか、19 世紀末にはネルに魅力を感じるどころか逆に、非難と嘲笑を浴びせるようになる。多くの批評家が指摘するように、ディケンズの『骨董屋』執筆姿勢にはあまりにも感情的になっているきらいがある。国家現象とも言えるネルへの賞賛ぶりは、ディケンズが故意に扇動した結果だと感じざるを得ないほどだ。しかし読み進めていくと、感情的という一言では片付けられない当時のイギリスが直面する複雑な現実気付かすにはいられない。本論文では『骨董屋』を評価するにあたり、常に矢面に立たされてきたネルと祖父トレント ( Trent ) の描写を中心に考察し、彼女の存在が作品にどのような影響をもたらしているのかを明らかにする。

## 2. 『骨董屋』の批評の変遷

『骨董屋』は、孤児であるネルの将来を案じたトレントが、彼女に十分な財産を残そうと一攫千金を夢見て高利貸しのクウィルプ ( Daniel Quilp ) から借金をし、賭博にのめり込む様子で話が始まる。しかし、間もなく完全に破産し、経営する骨董屋がクウィルプに差し押さえられてしまう。14 歳のネルとトレントは放浪の旅に出る決意をし、クウィルプに乗っ取られた家を去る。借金の形にネルを妻にしようとするクウィルプは、二人を執拗に追跡する。一方、トレントの弟 ( the single gentleman ) が外国から裕福になって帰国し、彼も二人を救おうと必死に捜索する。しかしトレントの弟がようやく二人の居場所を突き止め、救出に駆け付けた時にはすでに遅く、ネルは苦難の旅の末に力尽きて亡くなり、この作品は幕を下ろす。

この『骨董屋』のネルの悲劇は、身分の上下を問わず大勢の人々に同情の涙を絞ら

せた。トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) は大いに感動して涙を流し、フランシス・ジェフリー (Francis Jeffrey, 1773-1850) は肉親を亡くしたかのように悲しんだ。政治家のダニエル・オコネル (Daniel O'Connell, 1775-1847) は汽車の中でこの小説を読んでいたが、ネルの死の場面になると急に泣き出し、あまりにも辛いので本を車窓から放り出してしまったらしい。この話の真偽は明らかでないが、とにかくイギリス中の人々がネルと共に一喜一憂した。やがて、もはや彼女の死が避けられないと察するや、ディケンズにネルの「助命嘆願書」を送る読者まで現れた。この現象はイギリスのみに発生したのではないらしい。イギリスからの船がアメリカ・ニューヨークの港に入ると、待ち構えていた群集が入港する乗客に“Is Little Nell dead?”と大声で叫んでネルの安否を尋ねたとされている。

しかし、こうした伝説とも言える熱狂的賞賛への反動からか、19世紀末にはネルに魅力を感じるどころか逆に、彼女のペイソスがあまりにセンチメンタルだと感じられるようになり、厳しい非難と嘲笑を浴びせる風潮が生じる。オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) やオールダス・ハックスリー (Aldous Huxley, 1894-1963) はそのセンチメンタルな感情過多を厳しく批判し、デイヴィッド・セシル (David Cecil, 1902-86) は次のように辛辣に批判している。

He tries to write an extra tear from the situation; he never lets it speak for itself. One would have thought the death of an innocent and virtuous child should be allowed to carry its own emotion; but Dickens cannot trust us to be moved by little Nell's departure from the world unassisted by church bells, falling snow at the window, and every other ready-made device for extracting our tears that a cheap rhetoric can provide. No Hollywood film-director, expert in sob-stuff, could more thoroughly vulgarise the simple and the tender.<sup>1</sup>

これ程までに両極端の評価をされている『骨董屋』だが、現代の読者にとってはデイヴィッド・セシルの言葉の方がはるかに説得力のあるように思われる。しかし、ネルのペイソスがセンチメンタルにすぎないといくら断定しても、それは所詮彼女の数ある特徴の一つの指摘に他ならないのではないだろうか。

### 3. 『骨董屋』の特徴とその意図

『骨董屋』には大きく分けて三つの特徴があるように思われる。まず一つ目は、デイヴィッド・セシルなどが批判するネルのセンチメンタルな描写である。これはとりわけ彼女の死の場面に顕著であり、その代表的な様子が次のようになる。

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death. (538; ch.71)<sup>2</sup>

二つ目は最大限に利用されているコントラストの効果だ。これは、例えば清純無垢なネルが薄暗い部屋の中で非常にグロテスクな骨董品に囲まれ、ベッドで安らかに眠っているという構図に端的に示されており、その様子が次のようになる。

I had ever before me the old dark murky rooms the gaunt suits of mail with their ghostly silent air the faces all awry, grinning from wood and stone the dust and rust, and worm that lives in wood and alone in the midst of all this lumber and decay, and ugly age, the beautiful child in her gentle slumber, smiling through her light and sunny dreams. (22; ch.1)

また、このコントラストの効果は舞台背景だけでなく、人物描写においても当てはまる。美人で清純無垢なネルに対し、兄のフレデリック・トレント (Frederic Trent) は放蕩三昧の生活を送り、兄妹と雖も似ても似つかない。その様子が次のようになる。

The other stood lounging with his foot upon a chair, and regarded him with a contemptuous sneer. He was a young man of one-and-twenty or thereabouts; well made, and certainly handsome, though the expression of his face was far from prepossessing, having in common with his manner and even his dress, a dissipated, insolent air which repelled one. (23; ch.2)

そして三つ目の特徴は、当時の文化がありありと再現されていることだ。様々な登

場人物の中でもとりわけ強烈な印象を与えるのがクウィルプだが、彼の様子は次のようになる。

... he ate hard eggs, shell and all, devoured gigantic prawns with the heads and tails on, chewed tobacco and water-cresses at the same time and with extraordinary greediness, drank boiling tea without winking, bit his fork and spoon till they bent again, and in short performed so many horrifying and uncommon acts that the women were nearly frightened out of their wits, and began to doubt if he were really a human creature. (47; ch.5)

ディケンズが創造したクウィルプは、大衆に非常に人気のあった人形芝居『パンチとジューディー』(Punch-and-Judy show)の主人公パンチと似ており、パンチと同様にクウィルプも人間や動物を手当たり次第に虐待する。他にも『パンチとジューディー』劇を演じて歩く旅芸人のトマス・コドリン(Thomas Codlin)とショート(Short)、竹馬乗りの芸人グラインダーズ・カンパニー(Mr Grinder's Company)、犬芝居一座のジェリー(Jerry)などの大道芸人や蠟人形の見世物のジャーリー夫人(Mrs Jarley)の姿がとても鮮やかに描かれている。

では、ネルのセンチメンタルな描写、コントラストの効果、ありありと再現されている当時の文化の三つの特徴から浮かび上がってくることは何であろうか。それは、ディケンズが幅広い読者層を非常に意識して執筆していることであり、当時のイギリスで『聖書』に次いで愛読されていたジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-88)の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678)を下敷きにしていることから窺える。これは、ロンドンを脱出したネルとトレントが自然豊かな野原で休息を取っている時、ネルが嘗ての自分達がいた場所を振り返り、次のように言うことから明らかである。

'Dear grandfather,' she said, 'only that this place is prettier and a great deal better than the real one, if that in the book is like it, I feel as if we were both Christian, and laid down on this grass all the cares and troubles we brought with us; never to take them up again.'  
(123; ch.15)

ところで、幅広い読者層をこれ程までに意識したディケンズの意図は一体何であろうか。それは、雑誌の売り上げを伸ばすという出版事情は言うまでもないが、何より

も拝金主義のヴィクトリア朝社会を痛烈に批判することであろう。そしてその役割を効果的に担っているのがネルであると思われる。

#### 4. ネルの旅から見えるもの

拝金主義のヴィクトリア朝社会の様子は、ネルの旅が進行するにつれ、彼女の苦痛を通して強烈に読者へ示される。彼女はクウィルプに家を乗っ取られた後、“ We will be happy ” (101; ch.12) となるのを期待して旅に出るのだが、幸せとは程遠い光景を次から次へと目の当たりにすることとなる。とりわけ強烈なのが、旅を続ける毎に衰弱していくネルが倒れる寸前に立ち寄った産業革命の象徴の地バーミンガムだ。そこでは、不況の中、チャーティズム運動が激しくなり、各地で暴動が多発し、失業者が溢れ出している。ネルはひと口のパンをもらおうとある家を訪ねるが、冷たく追い返される。ふと見渡せば、貧困に喘ぎ苦しみ、身も心もぼろぼろとなった悲惨な人々が大勢いる。

ネルは目の当たりにした悲惨な光景だけでなく、当時を覆っていた拝金主義の価値観にも苦しむ。それは、登場人物の発言や行動に注目してみると明らかだが、例えば、寄宿学校の校長であるモンフラザーズ (Miss Monflathers) が裕福な生徒を鼻屑にする一方、貧しい生徒には冷たくするという態度などに顕著であり、その様子が次のようになる。

‘Don’t you feel how naughty it is of you,’ resumed Miss Monflathers, ‘to be a wax-work child, when you might have the proud consciousness of assisting, to the extent of your infant powers, the manufactures of your country; of improving your mind by the constant contemplation of the steam-engine; and of earning a comfortable and independent subsistence of from two-and-ninepence to three shillings per week? Don’t you know that the harder you are at work, the happier you are?’ (240; ch.31)

ネルはこのように叱責された為、思わず涙を流す。そしてモンフラザーズのこの言葉に象徴されるように、『骨董屋』では金銭が非常に重要な意味を持っている。モンフラザーズの言葉で思わず泣いてしまったネルは涙を拭おうとしたものの、ハンカチを落としてしまう。そのハンカチを咄嗟に拾ってくれたのがミス・エドワーズ (Miss Edwards) だった。モンフラザーズはミス・エドワーズを毛嫌いしている。それは、彼女が鼻屑にしている準男爵の娘が特別裕福であるにも拘らず、頭が悪くて顔が醜いの

に、一方のミス・エドワーズは母親を亡くして貧しいながらも、非常に聡明で、美しいからだ。このようにモンフラーズは、金銭が有るか無いかで態度が全く違うのである。またこの拝金主義が蔓延る世では、金銭が無いと幸福になれない。このことは『骨董屋』の登場人物の行く末が物語っている。嘗てトレントが経営していた骨董屋で奉公人だった、ネルの唯一の友人でもあるキット(Christopher Nubbles) は、その後ガーランド夫妻 (Mr and Mrs Garland) に雇われ、そこですでに使用人をしているバーバラ (Barbara) とやがて結婚し、幸せになる。キットはトレントの下ではとても貧しかったが、ガーランド夫妻という裕福で慈悲深い人物の下では、家族でアストリー座 (Astley's) に出掛け、夕食も出来るほどの楽しい休日を過ごせるようになる。これは、キットがもしトレントの下で働き続けていたらとても味わえない喜びである。クウィルプの顧問弁護士のサムソン・ブラス (Sampson Brass) の事務所で働いているディック・スウィヴェラー (Richard Swiveller) も、初めは貧しかったものの、親戚から遺産を相続したことが切っ掛けで結婚が可能となる。彼は、ブラスの事務所で使用人をしている彼が「侯爵夫人」(The Marchioness) と名付けた女性に教育を受けさせ、後に彼女と結婚する。ネルとの放浪の果てにトレントが廃墟同然の教会の鍵管理人となれたのは、嘗て村の学校で出会い、新たに遠く離れた村で教会書記と教員になって裕福になったマートン (Mr Marton) の計らいだった。トレントの弟はネルとトレントを必死に捜して救おうとするが、それは彼が外国で事業を成功させて裕福になったから可能となる。いずれも貧しかった頃には味わえないものであり、ここから至る所金銭が無ければ幸福になれないということが分かる。

では、ディケンズはこのような拝金主義をどのようにネルを通して批判しているのだろうか。それは単に終始金銭の影に付き纏われているネルの苦悩を示すことだけでなく、トレントの行為を軸として当時のイギリスが直面する複雑な現実を示すことで批判しているように思われる。

## 5. トレントの賭博癖

そもそもネルの旅は、高利貸しのクウィルプから借金をしてまでのめり込んだトレントの賭博癖が切っ掛けだった。拝金主義の現実と価値観に苦しむネルだが、彼女の苦悩に止めを刺すのは、“Between the old man and herself there had come a gradual separation, harder to bear than any former sorrow” (317; ch.42) というように、トレントの

賭博癖がもたらす二人の心の隔たりである。無一文になった為、経営する骨董屋を含む全財産を差し押さえられて全てを失ったトレントは、旅に出る決心をした当初は、今迄のことを全て忘れて新しい一歩を踏み出そうとする。しかしある日の夕方、ネルとトレントは散歩に出掛け、途中で嵐に遭遇した為、急遽近くの居酒屋で宿を取ることにするが、そこは主人であるアイザック・リスト (Isaac List) を中心とする賭博場でもあった。賭博を忘れようとしていたはずのトレントだが、その様子に気付いた時の反応が次のようになる。

The child saw with astonishment and alarm that his whole appearance had undergone a complete change. His face was flushed and eager, his eyes were strained, his teeth set, his breath came short and thick, and the hand he laid upon her arm trembled so violently that she shook beneath its grasp. (226; ch.29)

その後、トレントはネルから財布を奪って全てを賭博に注ぎ込むが、案の定負けてしまう。しかしこの時を境に、トレントは再び賭博に病み付きになり、ネルがどうしてもという時のために取って置いたお金までを盗むようになる。トレントの賭博癖は “ ‘Get me money,’ he said wildly, as they parted for the night. ‘I must have money, Nell. It shall be paid thee back with gallant interest one day, but all the money that comes unto thy hands, must be mine not for myself, but to use for thee. Remember, Nell, to use for thee!’ ” (245; ch.32) と更にエスカレートし、ネルは “ Distracted by these thoughts, borne down by the weight of the sorrow which she dared not tell, tortured by a crowd of apprehensions whenever the old man was absent, and dreading alike his stay and his return, the colour forsook her cheek, her eye grew dim, and her heart was oppressed and heavy ” (245-46; ch.32) とそれに対して苦しむようになる。

トレントによれば、ネルへ財産を残すために賭博を始めたのだが、ここまでになると呆れる程の愚かさとしか言いようがない。トレントは事ある毎に「お前のため」 “ to use for thee ” (245; ch.32) と言っているが、むしろ全くの正反対で、実態は自分自身のために他ならない。この異常な賭博癖から起こるトレントの行為について、フィリップ・ホップスボーム (Philip Hobsbaum) は “ Nell is not Quilp’s victim but her grandfather’s; Quilp can’t even find out where she is ”<sup>3</sup> と、ジェイムズ・R・キンケイド (James R. Kincaid)

ば“ Directly responsible for her death by removing her from every point of safety and kindness, he, it is clear, is much closer even than Quilp to being the chief villain ”<sup>4</sup>とそれぞれ論じている。これはまさしく的を射た、批評家の間で一致したトレントの評価である。しかし、ネルを苦しめ、最終的には死に至らせる張本人がトレントであると断定して済ませるだけでは短絡的なのではないだろうか。

## 6. トレントの過去

ネルを死に至らせた張本人としてすっかり悪人のレッテルを貼られたトレントだが、彼ほど『骨董屋』で貧困の恐ろしさを思い知らされている人物はいない。それは、彼が自分の娘、即ちネルの母親について何度も言及していることから分かる。例えば、貸した金銭を丸ごと賭博に費やしている事実を知ったクウィルプは怒りを露わにしてトレントを責め、これ以上は貸さないと告げる場面があるが、それに対するトレントの反応が次のようになる。

‘Nay, Quilp, good Quilp,’ gasped the old man, catching at his skirts, ‘you and I have talked together more than once of her poor mother’s story. The fear of her coming to poverty has perhaps been bred in me by that. Do not be hard upon me, but take that into account. You are a great gainer by me. Oh spare me the money for this one last hope!’ (84; ch.9)

後に、トレントの弟が二人の居場所を突き止めてそこへ向かっている時、彼は自分達兄弟の過去について話し始める。トレント兄弟は幼い頃から非常に仲が良く、幸せに暮らしていた。しかし弟は身体が弱く、病に倒れることが頻繁にあった。その都度兄は献身的に弟の看病をし、その為、かえって二人の絆が強くなった。ところが二人は一人の女性へ同時に愛情を寄せるようになる。弟は幼少期の兄に対する恩から、身を引く決意をし、イギリスを離れる。その後、兄はその女性と結婚するものの、妻は生後間もない娘を残して亡くなる。トレントは残された娘に献身的な愛情を注ぎ、必死に育てる。やがて娘は成人し、ある男性に好意を寄せるが、トレントの目に適う人物ではなかった。それでもトレントは、娘のような妻を持てば、この男はきっと立派になるにちがいないと期待して結婚させる。しかしその結婚生活は次のようなものだ



った。

‘Through all the misery which followed this union; through all the cold neglect and undeserved reproach; through all the poverty he brought upon her; through all the struggles of their daily life, too mean and pitiful to tell, but dreadful to endure; she toiled on, in the deep devotion of her spirit, and in her better nature, as only women can. Her means and substance wasted; her father nearly beggared by her husband’s hand, and the hourly witness (for they lived now under one roof) of her ill-usage and unhappiness, she never, but for him, bewailed her fate. Patient, and upheld by strong affection to the last, she died a widow of some three weeks’ date, leaving to her father’s care two orphans; one a son of ten or twelve years old; the other a girl such another infant child the same in helplessness, in age, in form, in feature as she had been herself when her young mother died. (525-26; ch.69)

トレントも娘もその夫の浪費により財産を失うが、彼が何より苦しんだことは娘の苦悩を見ていることしか出来なかったことであろう。彼が貧困の恐ろしさを思い知らされたのは娘の死が切っ掛けである。そしてこの体験が後に賭博癖という歪んだ形で悲劇をもたらしてしまう。

#### 7. ネルとトレントが望むもの

愛する娘を貧困で亡くしたトレントが孫のネルにしてあげられることは、財産をしっかりと残し、貧困とは無縁の世界に彼女を入れてあげることだった。これをトレントが『骨董屋』の語り手に次のように話している。

I have borne great poverty myself, and would spare her the sufferings that poverty carries with it. I would spare her the miseries that brought her mother, my own dear child, to an early grave. I would leave her not with resources which could be easily spent or squandered reach of want for ever. (34; ch.3)

トレントはネルに財産を残すために、一攫千金を夢見て夜な夜な彼女を一人で家に

残し、賭博場へと向かう。この行為を知った語り手は驚き、トレントを非難する気持ちを抑えられない。しかし、“*Disposed as I was to think badly of him, I never doubted that his love for her was real. I could not admit the thought, remembering what had passed between us, and the tone of voice in which he had called her by her name*” (20; ch.1) というように彼のネルへの愛情は本物であることも認めている。そしてここにトレントの行為の皮肉さを窺うことが出来る。

トレントが財産を残すために躍起になることは、金銭が無ければ幸福になれない時代背景を考慮すれば、一応の筋は通っている。まして娘が貧困で亡くなり、その苦しみを誰よりも思い知らされていれば尚更である。しかしその手段が賭博であることが問題なのは言うまでもない。家をクウィルプに差し押さえられたり、放浪の旅に出たり、最終的にネルが死ぬことになるのは、やはりトレントの賭博癖が全ての切っ掛けである。そんなトレントだが、その自分の行為にふと疑問を抱くことがある。その様子が次のようになる。

‘When I think,’ said he, ‘of the many years      many in thy short life      that thou hast lived alone with me; of thy monotonous existence, knowing no companions of thy own age nor any childish pleasures; of the solitude in which thou hast grown to be what thou art, and in which thou hast lived apart from nearly all thy kind but one old man; I sometimes fear I have dealt hardly by thee, Nell.’ (33; ch.3)

このようにトレントが自分の行為を冷静に省みるのは旅に出る前のみだが、自分勝手に賭博に打ち込んでいると思われがちな彼でも、実は葛藤していることが分かる。しかし彼は決して賭博を止めない。彼が望むことは、ネルを一攫千金で貧困と無縁の世界に入れて幸福にすることだけである。

一方のネルはそんなトレントの気持ちには頓着せず、夜中にたった一人で取り残された家で彼の帰りを待ち続けるだけである。しかしトレントにはいつもと変わらないように見えるだけで、実は彼女は不安な気持ちにかなり苛まれている。ある日、トレントの使いでクウィルプの家へ行ったネルは、彼の妻 (Mrs Quilp) に“*Only sighed, and dropped his head, and seemed so sad and wretched that if you could have seen him I am sure you must have cried;*” (56; ch.6) とトレントの様子を伝え、彼女の不安を打ち明けてい

る。更に“ We were once so happy and he so cheerful and contented! ”(56; ch.6) と前置きし、その時の様子を二つ挙げて次のように話している。

‘I used to read to him by the fireside, and he sat listening, and when I stopped and we began to talk, he told me about my mother, and how she once looked and spoke just like me when she was a little child. Then, he used to take me on his knee, and try to make me understand that she was not lying in her grave, but had flown to a beautiful country beyond the sky, where nothing died or ever grew old we were very happy once!’ (57; ch.6)

‘Then,’ said the child, ‘we often walked in the fields and among the green trees, and when we came home at night, we liked it better for being tired, and said what a happy place it was. And if it was dark and rather dull, we used to say, what did it matter to us, for it only made us remember our last walk with greater pleasure, and look forward to our next one. (57; ch.6)

ネルは、トレントが賭博場に行くようになってから不安で押し潰される日々を送る。“ We will be happy ” (101; ch.12) と期待して放浪の旅に出てからは、むしろ精神が安らぐ時は完全に無くなってしまう。拝金主義のヴィクトリア朝社会の現実とその価値観にショックを受け、クウィルプの幻影に絶えず脅え続け、何よりトレントの再燃した賭博癖に打ちのめされてしまう有様だ。ネルの苦悩は、終始彼女に付き纏っている金銭の影によって引き起こされている。そんな彼女が望んでいることは、金銭の影から逃れることであり、それを象徴する言葉が“ Let us be beggars, and be happy ”(79; ch.9) であろう。しかし皮肉なことに、ネルが望むものはトレントが望むものと全くの正反対である。これは何を意味するのであろうか。

## 8. 結論

ネルとトレントが望むことは、乞食の状態になることと、一攫千金で貧困と無縁の世界にネルを入れることである。その二人の決定的な違いは、金銭と幸福の関係に対する考え方である。幸福になるためには、ネルは金銭の影から逃れなければならない

と考へ、トレントは必要不可欠なものだと思ふ。これについては『骨董屋』の他の登場人物の行く末から明らかなように、トレントの方が正しい。実際、ネルは“ Let us be beggars, and be happy ” (79; ch.9) の言葉に象徴される、乞食になることが幸福になるという考へを旅が進むにつれて前面に出さなくなっている。特に、嘗て村の学校で世話になったマートンと再会し、彼が裕福になったことを伝えられた時に彼女が

“ 'Indeed!' cried the child joyfully ” (349; ch.46) と反応することからも明らかである。

ではネルの存在は『骨董屋』にどのような影響をもたらしているのだろうか。それは、トレントの賭博癖が切っ掛けで死ぬことにより、彼が体現する当時のイギリスが直面する複雑な現実を効果的に示すことである。拝金主義のヴィクトリア朝社会では、金銭が幸福になるために必要不可欠なものであり、それを誰よりも思い知らされているのがトレントだということは先に論じた。つまり、トレントが賭博にのめり込む行為自体は到底許されるべきことではないが、愛する人間を守るためには彼のような人物を生み出してしまうのが拝金主義のヴィクトリア朝社会なのである。ネルは死ぬことにより、その複雑な現実を示し、且つ効果的に風刺する役割を担っていると思われる。

本稿は平成 20 年度日本大学英文学会 11 月例会 (2008 年 11 月 22 日、日本大学文理学部) における口頭発表「『骨董屋』におけるネルの役割」の原稿に加筆修正を施したものである。

#### 註

- 1 David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation* (Harmondsworth: Penguin, 1948) 30.
- 2 Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop*, ed. Norman Page (London: Penguin, 2000) 538. 以後本論文中の括弧内の数字は、このテキストの頁数を示すものとする。
- 3 Philip Hobsbaum, *A Reader's Guide to Charles Dickens* (New York: Syracuse UP, 1998) 58.
- 4 James R. Kincaid, *Dickens and the Rhetoric of Laughter* (Oxford: Clarendon, 1971) 80.

#### 参考文献

Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. Harmondsworth: Penguin, 1948.

- Dalziel, Margaret. *Popular Fiction 100 Years Ago: an Unexplored Tract of Literary History*. London: Cohen, 1957.
- Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z: the Essential Reference to the Life and Work*. New York: Facts, 1998.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Ed. Norman Page. London: Penguin, 2000.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. London: Palmer, 1928.
- Gissing, George. *Charles Dickens: A Critical Study*. New York: Haskell, 1974.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. New York: Syracuse UP, 1998.
- Huxley, Aldous. *Vulgarity in Literature: Digressions from a Theme*. London: Chatto, 1930.
- Kincaid, James R.. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. Oxford: Clarendon, 1971.
- 北川悌二. 『骨董屋』(上・下). 東京: 筑摩書房, 2005.
- 松村昌家編. 『子どものイメージ 十九世紀英米文学に見る子どもたち』. 東京: 英宝社, 1992.
- . 『ディケンズ小事典』. 東京: 研究社, 1994.
- Newsom, Robert. *Charles Dickens Revisited*. New York: Twayne, 2000.
- 荻野昌利. 『歴史を読む ヴィクトリア朝の思想と文化』. 東京: 英宝社, 2005.
- 西條隆雄・植木研介・原英一・佐々木徹・松岡光治編. 『ディケンズ鑑賞大事典』. 東京: 南雲堂, 2007.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens Resurrectionist*. London: Macmillan, 1982.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. New York: Oxford UP, 2000.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1986.
- Walder, Dennis. *Dickens and Religion*. London: Allen, 1981.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.
- 出典: 『英文学論叢』(日本大学英文学会、第58巻、2010、pp. 31-45)